

もと慈円（じえん 1155－1255）の里坊の旧跡。元和元年（1615）に天海（てんかい 1536－1642）が後陽成上皇（ごようぜいじょうこう 1571－1617）より法勝寺（多くの天皇が剃髪の儀式を行った寺）を下賜され、この地に移築。明暦元年（1655）に後水尾天皇（ごみずのおてんのう 1596－1680）より「滋賀院」の号と広大な所領を賜った。1656年から1871年までの期間は、天台座主は出家した皇族が務めていたが、滋賀院はその住居として使われていたため、滋賀院御殿とも呼ばれた。

御殿については明治11年（1878）11月の火災のためすべて灰となった。1880年、比叡山の三塔からそれぞれ最高の建築が寄進・移築された。

堂々たる穴太積み様式の石垣と白壁の外周に、内には小堀遠州（こぼりえんしゅう 1579－1647）作の庭園があり、狩野派の絵師、渡辺了慶（わたなべりょうけい ?－1645）作の襖絵がある。内仏殿の本尊は薬師如来で、両脇には中国における天台仏教の創始者・智顗と、日本に天台仏教をもたらした最澄の像を奉安。毎日、国家の安泰と平和を祈願している。